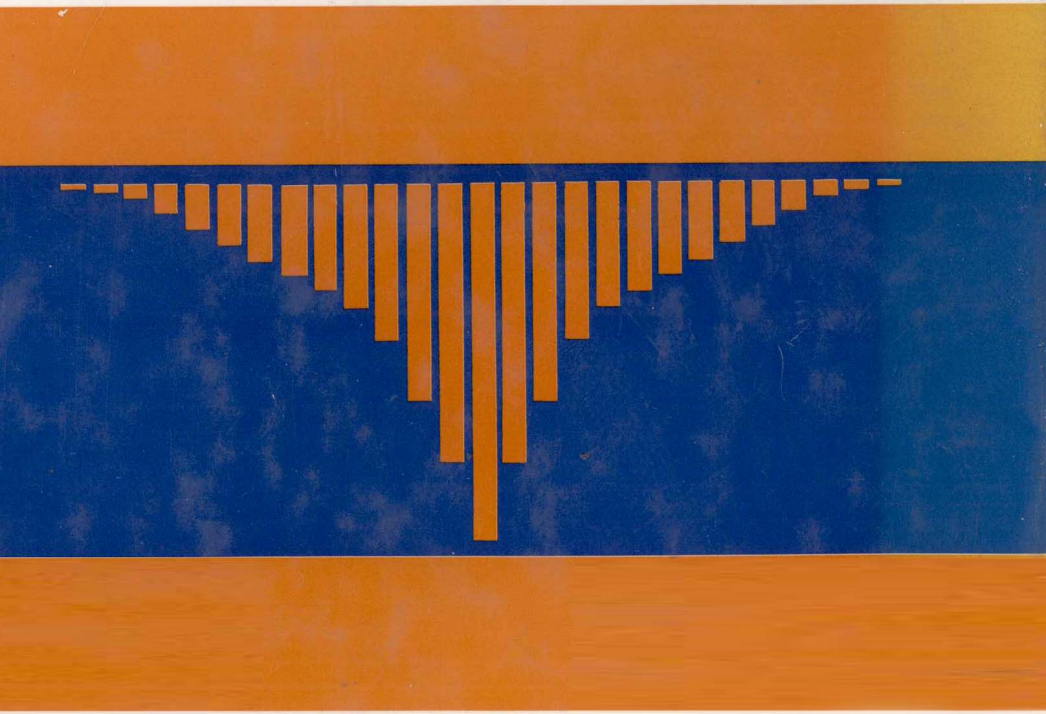
英知産業論

■生活優先産業社会への道

日本大学教授
名東孝二著



中央経済社

英知産業論

■生活優先産業社会への道

日本大学教授
名東孝二著

中央経済社

〈著者紹介〉

1919年生まれ。昭和19年神戸商大卒業。広島大学教授を経て，現在，日本大学教授，経済学博士，日本学術会議会員，日本実践経営学会理事長。

住所：〒112　東京都文京区春日2－22－5－407。

〔主な著書〕：「マネー・フローの一般理論」(時潮社)，「生活者の行動科学」(東洋経済新報社)，「生活者の革新のために」(評論社)，「生活者のための企業再生」(時潮社)，「会社鑑定の方法」(産業能率短大出版部)，「G・ゴイダー　私企業の将来」「G・ゴイダー　企業と労働者の責任」(ともにダイヤモンド社)。

著者との
了解により
検印省略

英知産業論——生活優先産業社会への道

昭和53年9月10日　第1版発行
昭和54年6月5日　第3版発行

著者　名東孝二

発行者　渡辺正一

発行所　株式会社　中央経済社

東京都千代田区神田神保町1－31－2
電話　(293) 3371(編集)
(293) 3381(営業)
〒101　振替口座・東京0－8432

印刷　㈱昭和工業写真印刷所
製本　美行製本

落丁・乱丁本はお取替え致します。

3060－610838－4621

はじめに

世界史を揺がす大きな地殻変動がすでに起こっていることは，2回の世界大戦とその後のアメリカのベトナム敗戦，そして1929年の大恐慌とすでにその渦中にある世界的規模のスタグフレーション（不況とインフレの共存という長期停滞現象）を体験している今日では，もはや明瞭である。しかしながら，唯物論的エゴの拡張意欲が捨て切れず，惰性と既得権益に居座りつづけようとする人間，特にドップリと拝物主義に浸っている日本人には，明日は無いのではあるまいか。現にアルビン・トフラー (Alvin Toffler) は言う。「80年代後半にかけて危機と不安の時代が加速化していく。……結局，この産業文明は衰退し，全く新しいシステムが，かつての産業革命と同じように作り出される」と。この激動の10年を経営者たちも感じとっている。経済同友会まとめの『企業経営者意識に関するアンケート調査』によると，「こんご10年以内に自民党の単独政権が崩壊する」，「石油危機が再びやってくる」，「防衛費比率が高まる」など，相当な環境変化を意識しているようだ。人類の未来に警告を発している国際民間団体のローマ・クラブのアウレリオ・ペッチェイ(Aurelio Peccei) 会長も新しい提案をしている。「熱帯雨林の消滅をはじめ，資源の浪費，南北問題の拡大など，破局に向かう現在の傾向を食い止め，人類が新たな方向を見出すための時間は，もはや10年とは残っていない。それで，同クラブの新たな計画として，人間の能力自己開発の分野を取り上げる」と。

かくて，ジョーン・ロビンソン (Joan Robinson) の言うように「社会科学の使命は，社会的自意識を第二段階にまで押し上げることである」ならば，一種の日本教の変型である“日本株式会社”（近代国家主義と身分・年功序列的集団主義

と企業中心の生活共同体観と唯物論との結合であり，一種の甘えと癒着の変型である）という世界観について，その由来と破局的結末を示し，同時にそれからの脱却の手がかりを提示することが本書のネライなのである。

なぜ当為 (ought to be) であるべきかについては，ジェニングス (Jenings) の言葉（飯島衛引用）のように「各個体は体験の中心をなし，世界の一観察者であると同時に一演技者である」から，究極的になんらかの価値判断を免れ得ないからである。

想えば，“価値判断論争”等を通じて近代科学から倫理性，特に情念の追放されて以来，すでに久しい。デカルト的解析方法に始発された物理学的メトーデが経済学等を支配し，人間学をも抑え込もうとしている。しかし，これからは物理学的世界観よりも生物学的世界観，いや東洋的な英知の輝きが必要なのではあるまいか。主体性の強い人間関係の秘奥を解き明かすものは，片々たる知識・情報を超えた知・情・意の全体像（トータル・イメージ）の客観的把握とその理論的体系化とその実証との繰り返しという一連の体験的作業ということになるであろう。

したがって，われわれ人間の主体性（その独創性は多分に倫理性によって裏付けられている）の担い手としての生活者こそが，この錯雑する人間関係を解き明かしていく鍵（かぎ）であると思う〔筆者の‘生活者’概念の使用は，論文では10数年前になるが，編著書では昭和45年『生活者の革新』（オリオン出版社）が始まりとなっている〕。さいきん特に‘生活者’概念を使用するものがとみに増えているが，その多くは消費とウラハラの生活をする者として，いわば非歴史的没価値的に捉えている。これらはいまだ生活者の持つ現代的意義を解せざるものである。

ともあれ，われわれ人間の主体性増進の有無，これがここにいう生活者化の判定基準なのである。したがって，この人間の主体性の向上に役立つ産業としての英知産業への脱皮が提唱されるのである。しかしながら，これへの坦々たる道が開かれているとは到底思えない。ここにいう英知産業なるものが存在し得るとすれば，それは苦難と辛酸の結果，体得されるところの全体的（ホールネス）な智恵

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の復帰以外にはないと惟う。この全人的な智恵は，単なる知識・情報を超えた英知に導かれ情念によって推進される全人格的なものである。このはるか彼方のものだが，ある意味では身近なものである。特に来世紀が東洋的な精神（こころ）の時代であることを惟えば，キレイゴトを省みず，あえて産業人の方々に内在的批判の考え方を提起せざるをえないのである。というのは，営利本位の企業中心の産業社会にもなんらかの人間価値の実現とか，企業文化化の動きが始まっており，この近代社会の最精鋭にして，もしも真の現代的課題に眼ざめて蹶起するのでないならば，まことの現代社会そのものへの脱皮の希望は失われてしまうからである。

想えば，およそ50年の昔，日明小学校（福岡県旧小倉市）で恩師上城工先生から‘生活’というテーマで作文するよう言われ，これが契機か，その当時に書いた‘浮きみ沈みの人生’をそのままに体験しながら，この‘生活体験’を常に反省して，自分の理論的バックボーンとしてきたのである。これが広島大学時代の‘消費者主権の反省’を通って“生活者”として結実していった。

しかし，今は亡き大熊信行博士や彦根高商時代以来の恩師桑原晋博士，その他多くの先生方のご高恩を忘れることはできない。

また，1・2章は新稿だが，3章は，‘日本大学経済科学研究所紀要第1号’の共同執筆者 正慶孝氏のお許しとアドバイスを得て転載した。同氏に心からなる感謝の意を表する。4・5章と付録は，もと『地球を守る経済学』（読売新聞社，ただし，現在は絶版）の中の拙稿「破滅を救うもの」をお手本（昭和49年初頭の執筆以来，4年半の今日でも，その主張の正当性を確認している）に加筆・拡充したものである（ただし，付録は一種の歴史的文献として残すためにそのままである）。

ともあれ，本稿は筆者生涯の本格的論稿のひとつである。大方のご叱正とアドバイスをいただければ，幸いである。

祖父母・両親ともに永眠する大阪・長柄墓地の蒼天を仰ぎながら，

蟬しぐれ　青葉散る世に　わが想念（おもい）

1978年　夏

偲親　名東孝二（なとうたかつぐ）

目　　次

1章　人間を見直す …… 1

人間の影の部分 …… 1
人間の複雑性 …… 6
人間の光りの部分 …… 8
革命の公式 …… 11

2章　近代化とはなにか …… 13

単純化思考の支配とそれからの脱却 …… 13
人間生残りのための遺産贈与 …… 17
市場経済中心から家計経済中心へ …… 18
大量(マス)化による物質支配とその弊害 …… 23
グローバルな救済的願望と造反の波 …… 25
近代的国づくりの型 …… 26
第三世界・第四世界の覚醒と民族支配と博愛の流れ …… 28
生活者への道 …… 31
グローバルな“贈与経済”への歩み …… 32

3章　近代化社会批判への道 …… 39

「環境革命」の創世紀 …… 39
「豊かな社会」対「廃棄物社会」 …… 40
「工業化社会」の正負両側面 …… 42
近代の原理 …… 44
「ホモ・ファーベル」と「メガ・マシン」 …… 47

「ホモ・コンスメンス」の行動様式 …… 51
経済学と生態学 …… 53
工業化社会から脱工業化社会へ …… 55
都市の病理 …… 58
福祉世界への道程 …… 61
「楽園回復」への道筋 …… 64

4章　破滅を救うもの …… 73

幻の豊かさ …… 73
国家権力の“核分裂” …… 77
日本株式会社の実態とその発展的解消 …… 82
“生きがい”を求めて——人間充実の時代へ—— …… 90

5章　英知産業を求めて …… 101

新しいシステム社会 …… 101
生活優位産業・新システム産業への道——英知産業—— …… 107
“世界産業再配置構想”とまとめ …… 120

付録　1．「ローマ・クラブ・シンポジウム」の紹介と批判 …… 155
2．マンホルト書簡——国民総有用性への転換—— …… 168

索　引 …… 181

1章　人間を見直す

人間の運命は，大空をいろどる多彩なる閃光であるかもしれない。事実「線香花火的繁栄で絶滅する可能性」があるのである。しかし，いつかは絶滅するにしても，地殻変動のような天変地異や地球上あるいは地球以外の外敵によって滅ぼされるよりも，おのれ自らの手によって自滅する公算のほうが，はるかに高いのである。なぜならば，人間の限りない拡張欲求に対する自然の報復（これも一種の自滅的行為によるものであるが）よりも先に，人間同士の共食いによる同士討ちが人類生存の致命傷となりかねないからである。

人間の影の部分

「生れつき誤りを犯す傾向をもった適応制御システムとしての人間の役割，……現在の世界を支配しているものは，軍事政策であり，また物質財の生産を度はずれて強調すること」(1)である。

現に，軍事費の重圧と武器貿易の増大が目立っている。国連事務総長報告によると，「現在世界の軍事支出の合計は毎年約3,500億ドル（70兆円）と推定（この調子だと，2000年には年間1兆ドルに達すると）されている。各国平均ＧＮＰの５－６％を軍事費にまわしていることになる。」特に最近目立つのは，発展途上国の軍事支出の急増と武器輸入の急伸である（図表1－1，1－2参照）。

ガルブレイス (J.K. Galbraith) も核戦争の危機を強調しているではないか(2)。また，ボールディング (K.E. Boulding) は次のように言っている。「核兵器の発

達は，国際システムに短期的な安定性を付与したかもしれないにせよ，その究極的な病的性質を強化してしまった。……核兵器が発射される確率がゼロであったならば，それは核兵器をまったく持っていないのと同じことになってしまうだろう。それゆえ抑止は，それが崩壊して破壊の脅迫が実際に実行される可能性を，いかに小さかろうと正の確率で持っていなければならない。核戦争の確率が正であるならば，十分長い期間の間には戦争が起こるだろうことは明白である。その確率が年間わずか1パーセントであったとしても，それが100年間累積すればきわめて不気味な大きさになってしまう。」(3)

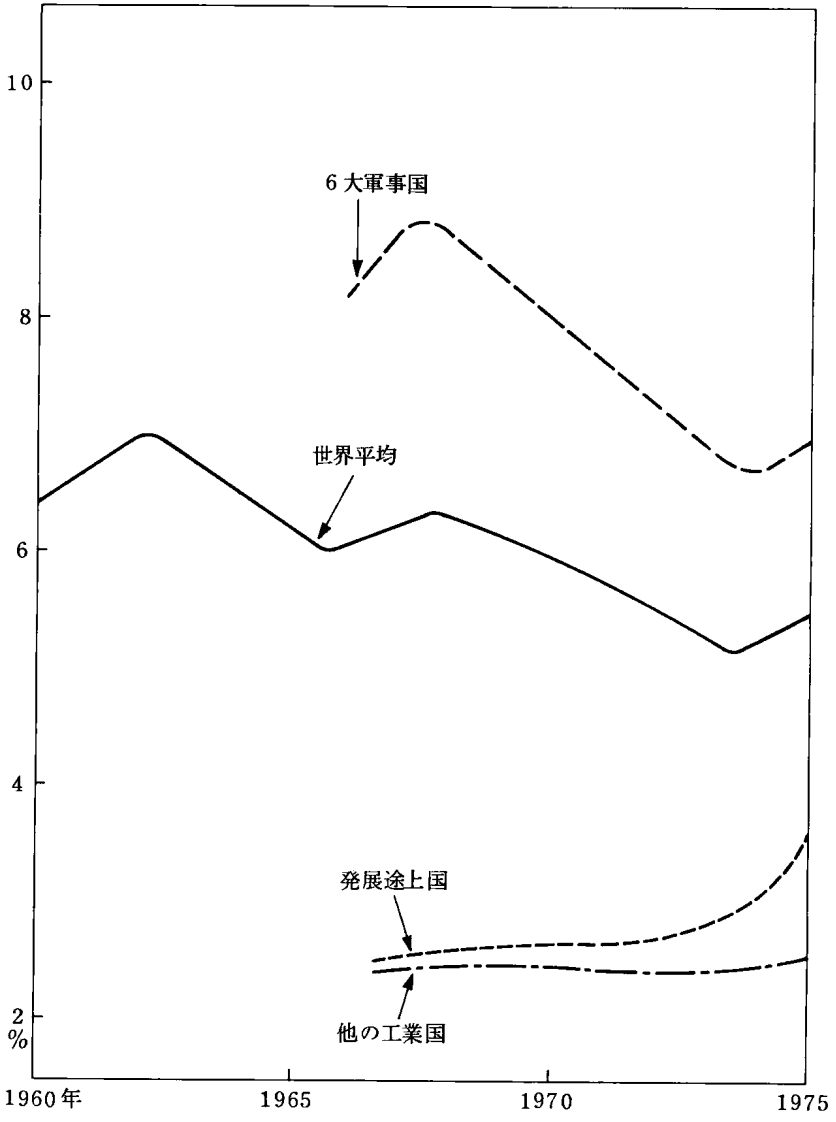
またボールディングは次の「三つの落し穴」(4)を指摘している。「無制限の人口の増加」，したがって，貧困と飢餓の瀰漫であり，「戦争」と「エントロピーの落し穴」（自然資源や地質学的資本の無制限な使用による）である。こういった民族間の殺し合いどころか，“人間救済”を謳う宗教団体の間ですら熾烈な闘争があるではないか。その一例は，もともと旧約聖書に根を発するというイスラム教とキリスト教とユダヤ教の教徒たちの戦いを見れば十分だろう。

このような闘いはなにに起因するのだろうか。思うに，人間としての生命バイタリティーのなかの生存意欲と拡張欲求，特にあくなき自我拡大欲求に基因しているのであろう。人間の特徴は，二本足で立って頭脳と両手を駆使し事物を手段化してきたことにあるとすれば，人間の作り出した数々の道具を使いこなすだけに，人間の自然に対する闘いと人間の人間に対する闘いはよりいっそう凄惨なものとなるのではないか。“おれが”“おのれこそ”という狭小な自我が巨大なる道具をもてあましているのが現状ではあるまいか。

「本質的に，人間は自己の本性を通じてではなく機械を通じて行動するようになった。……人間存在は特定の機能に分断される〔そのため“生産人”になったり“浪費人”に化身したりする――筆者〕ため，世界の現実性はテクノロジーにより征服されると同時に失われて回復不可能となる。……この状態は要するに，人間が自己以外のあらゆるものを変革することにより，人間を人間たらしめて

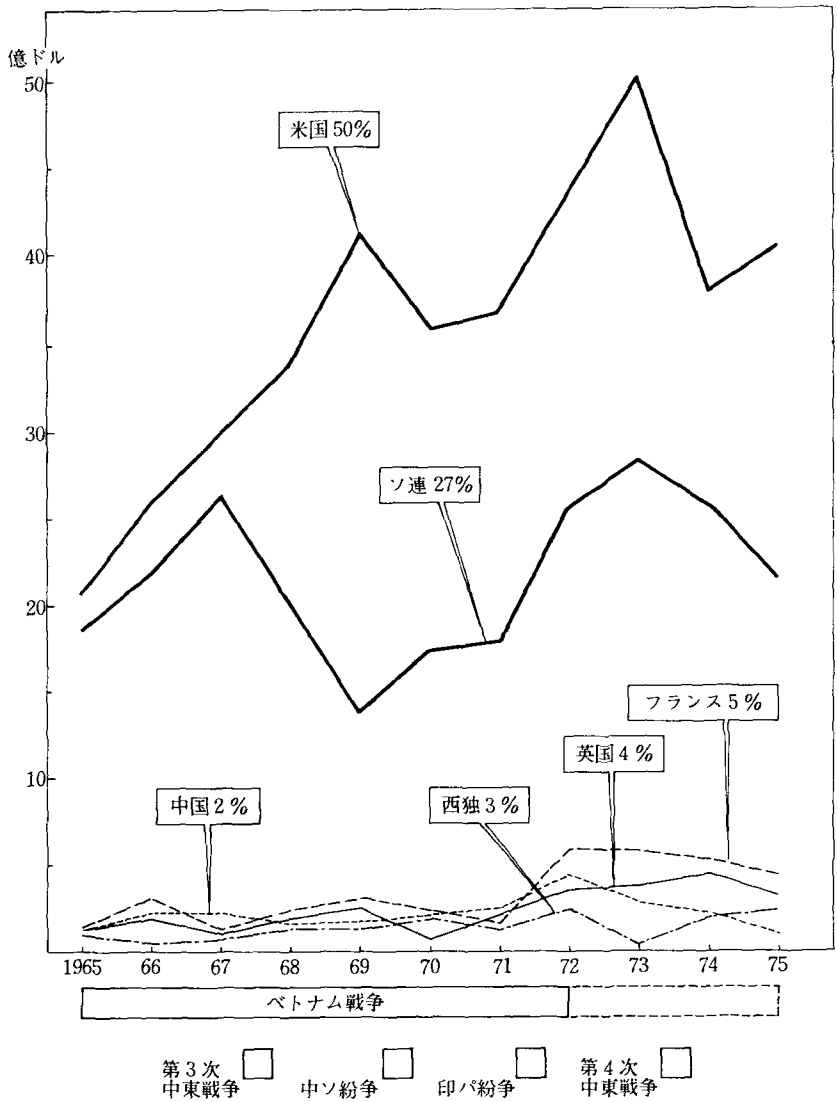
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

図表1－1　軍事支出の推移（対GNP比）



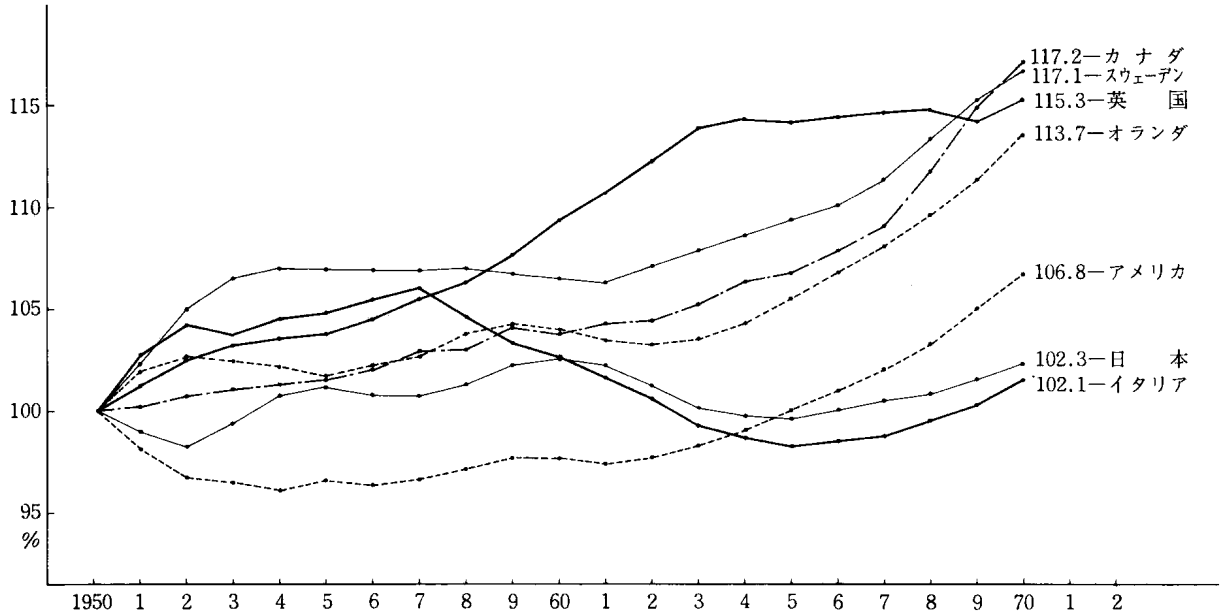
（注）(1) 国連事務総長報告より。
(2) 6大軍事国は，アメリカ，ソビエト，中国，イギリス，フランス，西ドイツを指す。

図表1－2　主要国の武器輸出状況



（注）　%の数値は1975年の全世界の武器輸出額に対する割合
出所：アメリカ軍備管理軍縮局
図表1－1，1－2とも朝日新聞（昭和53年5月）より取材。

図表1-3　修正変動率によるアノミーインデックス



（注）　1950＝100　犯罪（殺人），交通事故，離婚，自殺，労働損失日数，失業率の総合指数
出所：総合研究開発機構『先進国問題の帰趨と国際社会への反映』46頁。

いる「夢を抱く能力」を喪失することから生ずる結果である。」(5)　すなわち，人間の主体性を喪失するのである。「人間の個性をテクノロジーの規範に合致しないものとして排除する価値転倒の世界」(6)である。

人間の複雑性

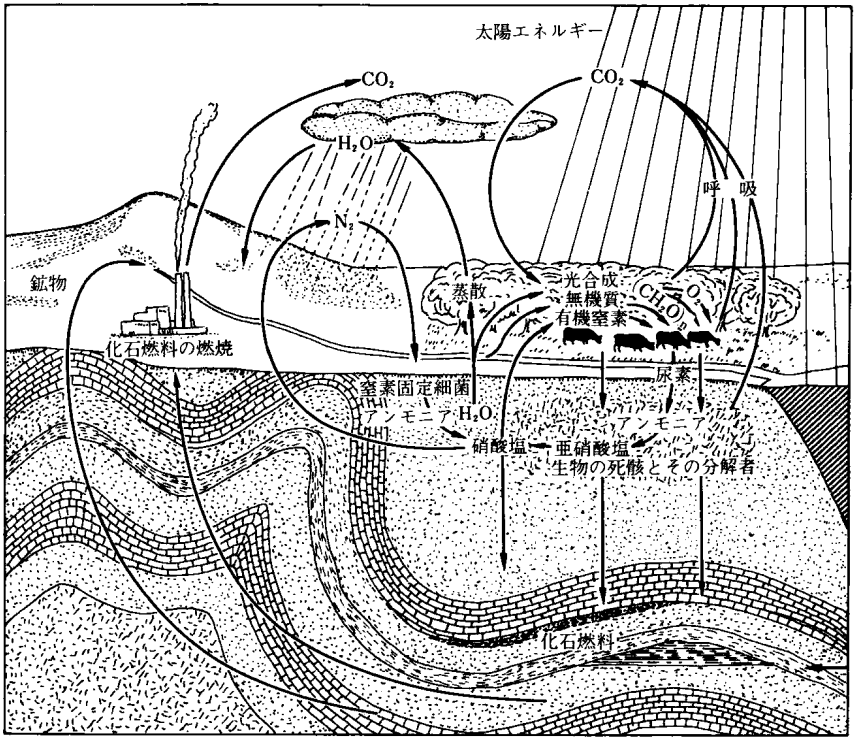
「精神の破滅のもっとも重大な結果は」エーリッヒ・フロム (Erich Fromm) は書いている，「破壊的傾向と暴力である」。「生きた機構より法と秩序を，自発的な方法よりは官僚的な方法を，生物よりも玩具を，オリジナルよりはコピーを，充溢よりはよき秩序を好む人びとは……生きていないものに惹かれているのである。かれらは生命の統制しがたい自発性を怖れるがゆえに，生命を制限したがるのである。」しかし他方では，「この奇妙だが強大な文明に対して『反文化』のある形態が，……浮かび上がってきている。官僚主義と組織の支配に対して個人の自発性を，物と消費よりも生命を，すなわち，より多く所有し，持つことではなく，完全に自分自身であることを望んでいるのである。」(C.ジュリアン —Claude Julien—，天野訳『崩れゆく民主国家』278—280頁)

それで，「人間個性の本質的複雑性」が求められるのであるが，ある程度の無秩序というか異端者というものが必要であり，また，自然界の理法においても容認されている。

「ゾウリムシにも，イヌ一匹一匹にも個性がある。……自分自身にある幅があって偶然と必然がからみあって個性が形成される。」「適者生存は無秩序という素材を使って〔変換によって——筆者〕秩序を得るという残忍なやり方」であり，「生物の進化は，偶然的な変異（あるいは変り身の早いプロテウス的行動）の結果が自然の選択で残ったもの」である。それで，多様性の根拠は「おのおのが独特であるから，種にとって価値がある」，「あらゆる特性や価値や個性を画一化することは非生物学的である」(7)ということにあろう。

また，情報学の論理からしても，当然同じようなことになる。「秩序と混沌，この二つを切りはなし，対立的に見るというのは，われわれの見方ではない。可能なすべての配置なるものをわれわれは想定したのである。秩序といわれるものも，こうした可能な配置の特例なのであるという認識に立ってみている。」(8)

図表1－4　生物圏における主なサイクル(9)



大気中の二酸化炭素（CO_2）を光合成的に還元し，一方では有機化合物（$(CH_2O)_n$）をつくり，他方では酸素分子（O_2）をつくる。太陽エネルギーの利用によって生物圏の営みは成り立っている。いわば「エコ・システムとしての生物サイクルは明らかにひとつの開放定常系である。」玉野井芳郎『変容とげる自然像』

人間の光りの部分

ところが，あくなき生存と拡張の欲求に駆られて自我を拡大していっても，しょせん生命の有限性と他人の自我というカベにぶち当たらざるをえない。また，全体の場の秩序に対する個我の自由が自発的な力（パワーには一面自己を守るはたらきがある。後述するM．コーダー (M. Korda) によると，「パワーこそ他人の残忍，冷淡，非情からわれわれの身を守る手段なのだ」という。）と概念の発揚を通して，すなわち，なんらかの変換を通して，新しいシステムに組成されていくという事実を理解するようになる。少なくともこの世界（宇宙）には個我の世界で考えられているほどの断絶はなく常に浸透し合っていること，矛盾的対立ではあるが，一体性のあることに気付く。少なくともいろいろなフィードバックを通じてサイバネティック・システムが交流し合っていることがわかる。また，この世界の構造とともに不断に流れ行く時間の実相，すなわち，歴史的な展開・流転の諸相を観ることができる。

この時空の実体を体得したものが人間の智恵であり，これが自然の理法にかなうバイオエシクス（Bioethics:生物の倫理）の基礎である。この全人的な智恵によって人間は外延的な支配欲求から内包的なおのれを見直すうずまき志向に開眼する。エマーソン (Ralf. W. Emerson) の言うように「どんな人間でも，なんらかの点で私よりもすぐれている――私の学ぶべきものを持っている」のである。このように他者との一体感，「他人の立場を考える能力，他人のうちに自己を措定する能力」がある。「人はたえず，すべての他人の役割を，あたかも自分がそれを引き受けたかのように理解しようとしている」(10)。この他者との一体感のもとにこの非情ではあるが恩寵のある世界に立ち向かうときに善なる行為（「鳥獣などが，自己の身の危険を冒して仲間に外敵の接近を知らせる行動とか，……反面K．ローレンツ (Konrad Lorenz) の『いわゆる悪』とは，魚や鳥や獣の個体が，

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com